

☛ [特集] オープンダイアログ——心理職のために

対話・音楽・時間

近未来から届く言葉たち

野村直樹 Naoki Nomura

名古屋市立大学

夢のような話をしてみる、対話と音楽と時間が実は同じものだという。ただし、お伽話ではなく、サイエンスの考え方にできるだけ忠実に従いたい。具体的には、対話というものの輪郭を、音楽と時間でもって描こうと思うのだが、こんな非常識は空中分解に終わるだろう、というのが大方の予想だろうから、ほくには一つ秘策がある。それは、みなさんに魔法の壺の中に入れていただくこと……。

I 壺の内

さて、入っていただいた壺は、中から見たら思ったほど狭くない、けっこう広い。この壺世界の内には2つの特徴がある。1つは、起こった事柄の効果と反応がつぶさに見てとれること——ちょうど赤外線カメラが対象物の熱分布を可視化するように。効果と反応というのは、こちらの行為や発したメッセージが、反応とともに向こう側から返され戻ってくるし、こちらの反応もまた相手に返っていき効果を生むという双方向性のことだ。壺内では、ものごとはすべて2方向あるいは循環して起きている。ということは、他人を批判してもそれは自画像（自分のことを言っている）のようになるし、環境の破壊は自己の破壊につながる。

有楽町から出た山手線が一回りすると、「行く」ということは「帰る」ということになる。ちょっと頭がクラっとするかもしれないが、壺の文化に慣れていただくしかない。

2つ目の特徴は、観察、実験、データ、分析という類いの外部からの眺めではなく、私が参加する、共同作業する、内側に留まるという、「私」の存在がそこに含まれるということ。つまり、先の場合は、「それが」とか「あれが」が主語になるので、その語り口は三人称になる。だが、あとの場合は、「私とあなたが」とか「それが私に」のように二人称になるのがわかる。これは、内側からものを見るという内部観測（松野，2000）のことで、客観的になろうと一段上から見下ろす外部観測とは対照的だ——みな参加者なので、誰もが他に対して水平である。すると、観察者は観察されていることになるし、裁定者は裁定されることになる。人それぞれの自発性、主体性に優劣はない。以上、壺世界内の2つの特徴は、それぞれ「双方向性」（Bateson, 1972）と「参加のロジック」（Berman, 1981）としてまとめられる。しかし、これら2つの特徴は緊密につながっている。

II まてよ

すると敏感な読者はここで何かに気づく。「壺世界に入ったのだから、双方向と参加が基準なんだろう？ だったら、対話、音楽、時間という呼び方は三人称であって、二人称の世界とは相容れないではないか？」その通りである。参加のロジックの定義に従えば、壺世界内では、「対話する」「音楽する」「時間する」というように、「私」を含む表現にそれぞれが取って代わるべきなのだ。なぜなら、すべての個人それぞれが行為者であるから、不参加をいいことに高みの見物で「対話とは何か？」と問う者はいない。「私」が入らない問いの立て方、「対話とは」という^{アプローチ}接近法は、壺世界にはない。ここではものの問い方、表現の仕方が二人称的、つまり対話従事的になる（野村、2018a, b）。

III 時間するって？

しかし、「対話する」「音楽する」まではよいとしても、「時間する」となると、面食らう人が多いだろう。でも、大丈夫！ ここは壺世界の内、強力な魔法が効いている。恐れず時間を強引に参加の論理に従わせよう。机の脇でカチカチやっている時計、それが示す時間に自分の参与性は見当たらない、寝ていても進むからね。それ自体は（時計屋さんと物理学者以外は）一見どう「する」こともできない。ところが、自分の腹時計、急ぐ通勤時の時間の進み具合、田園や広場にいてゆったりと流れる時間、そのどれにも「私」あるいは主体の参加がある。ただ平然とカチカチやっている置き時計とは違う。

「いや、そうじゃないだろ！ 腹時計なんぞは錯覚であって、本当の時間は別にあるのだから」という声が聞こえてきそう。しかし、考えてみよう。客観的な実在ばかりがわれわれの行動に影響するとは限らない。光源氏もフーテンの寅さんも歴史的事実でないにもかかわらず、あれだけ多

くの人を動員し行動を起こさせる——源氏物語現代語訳ラッシュから柴又帝釈天の参道の大賑わいまで。人の行動は客観的存在に縛られない。人の時間行動もまた客観的な時計のみに準ずるとは限らない——「錯覚時間」は大いに私たちの行動を色づけるのだ。壺文化では参加のロジックという基準に従い、人が参加する行動を対象とするため、「錯覚時間」は立派な時間となる。

この「錯覚時間」（仮にそう呼んだが）は、個人が計るから一人称の時間で、それを「A系列の時間」（McTaggart, 1927 ; Nomura et al., 2018）と呼ぶ。一方、置き時計の三人称の時間は「B系列の時間」（McTaggart, 1927 ; Nomura et al., 2018）と呼ばれる。A系列の時間には、個人が関わる（参与する）ことで、過去・現在・未来というはっきりした時制がある。しかし、B系列の時間には、ひとの関わりがないのが前提で、前後関係しか認められない。ここは間違う人が多いのだが、今の時間を度外視して、単に時計の文字盤を眺めてみよう。1時、2時、3時とあれば、1時は2時の前、3時は2時の後でしかない。B系列の時間はそういうシステムであって、過去・現在・未来はない。「私」の参与がないのだ。したがって、A系列時間のほうは参加を必要とするが、B系列時間は参加不要。そこで、参加を要しない時間はどうする？ 思い出してくださいね——定義に従い、とりあえず壺からお引き取りを願う。時間は、「時間する」しか壺世界内ではありえないのだから。

IV もうひとつの時間

ところが、A系列の時間以外にも、参加を前提とするもうひとつの時間がある。それは、「対話的時間」（E系列の時間）（Nomura et al., 2018 ; 野村ほか, 2015）と呼ばれるものである。これは、複数の人間がタイミング合わせをする際を想像したらよくわかる。2人以上で打楽器を鳴らす、ペアダンスする、合唱する、二人三脚で進む、会話

するなど、これらはどれも呼吸合わせ、タイミング合わせ、時刻合わせをもとに成り立つ行為群である (Timing というくらいだから時間のことだ……)。試しに会話で相手と同時に発話してみる。会話は成立しない。相手の動きを計算せず自分のステップだけでダンスをしてみよう。相手の足を踏んでしまうだろう。会話はターン・テイク (turn taking) (Sacks et al., 1974) といって1人ずつ発話することで成り立つし、ペアダンスも両者が調和・同調 (シンクロ) し合えるよう、お互い相手の動きに照らして自らを修正しながら踊る。この一連のリズム合わせを腕時計 (B 系列時間) に頼る者はいない。この場合は E 系列の時間を計るための異なる時計が必要になるだろう。それは、「対話的やりとり」という名の時計である。

つまり、壺世界内では、「対話的やりとり」は、参与者にとって時計のはたらきをする。「時間する」は、「対話的やりとり」と同義になり、ダンスも、会話も、共同歩調も、非言語的であるものの、双方向のコミュニケーションとして、お互いのタイミングを合わせ合う時計になることで可能となる。またその逆も言えて、時刻合わせをする時計になること、すなわち「私+あなた」という二人称の交渉体ができることが、参与者間の対話が成り立っていくための条件となるだろう。時間は言葉であり、E 系列の時間は、「時刻合わせ」という文法をもつ言語形式なのだ。

V 対話としての音楽

それでは、次に「音楽する」の場合はどうだろうか。壺世界には、「これは音楽だ」とか「これは音楽ではない」などと裁定を下す者はいない。双方向性と参加のロジックという2つの基準に合致して「音を楽しむ」ことが「音楽する」に相当するはずである。1960年代初頭、Eric Dolphy (エリック・ドルフィー) を迎え入れた John Coltrane (ジョン・コルトレーン) 四重奏団は、批評家たちから「反ジャズだ」という批判を浴び、

いっときコルトレーンを苦しめる。しかし、半世紀以上経った現在、その演奏はなんと美しくまっとうなまでにジャズ的なことか! 参加の論理を欠く壺外からの批評は、往々にして内部従事者たちを表面的にしか理解しない。ジャズは、演奏者たちと聴衆との双方向性が古典音楽よりも高い、また即興演奏が主となるため、演奏者間の双方向性、すなわちインタープレイが重要なコミュニケーションになる。つまり、バンドの参加者同士にとって音やリズムはまさに「言語」に相当する。

インタープレイは対話によって成立するが、そのことを異なるビートを打つ2つのリズム楽器の合奏で考えてみよう。個別でではなく、相手と合わせて叩きつづけるとすると、お互いが相手のビート (拍) を聴きながら自分のビートを刻むことになる。そんなとき、お互いが刻んでいる拍そのものが「時間している (timing している)」本態、つまり E 系列の時間であることが了解できよう。リズムが次第に噛み合って調和しはじめると、楽器と自分が、演奏者同士が一体化し、ほとんど意識することなく拍が刻まれていくことになる。よく言う「グルーヴ」という状態に近づくわけだが、このとき時間に関するある特異なできごとが起る。それは、次の拍を予期する行動が現出することである。相手の拍のタイミングを予想して、こちらは前もってビートを打つ行為にかかる。ダンスで足を踏み出すタイミングもこれと同様、「近未来」を予測して行為する。相手のステップを確認してからこちらが足を踏み出したのでは、ワントempo遅れるからだ。したがって、相手と同期するためには、予期・予測が必要となり、相手からの結果が見える前にすでに行動を起こすことが求められる。

VI 近未来からの伝令

予期をもとにしたタイミング合わせというのは、お互いのリズムが合いはじめたとき、つまり相互予期可能圏に参与者たちが入ったとき、ゼロ・

コマ何秒か先の近未来から情報がもたらされる、と表現できそうだ。「未来」は、物質ではない、言語的に構成されたもの、いわば図式のことである。たとえば、あなたが自転車に乗り前方に障害物を認めた場合、安全のため止まったり減速したりするのは、衝突や危険というイメージから取った行動である。このイメージが予期のための「内部モデル (internal models)」(Mischiati et al., 2015) という広い意味での言語形式である。ここで言う「未来」は遠い未来のことではない——ほとんど「今」に隣接した直近の未来であることを念頭に！

さて、われわれは、普通、原因がまず先にあって結果は継時的にそのあとに来る、と考える。これは理解しやすい順序である。しかし、予期行動の場合は、まだ起きていない未来の出来事が原因となって現在の行動という結果に結びつく。「原因があって結果に」と「現在から未来へ」はセットであったはずなのに、「原因があって結果に」と「未来から現在へ」がセットになってしまい、普通で言う因果律が崩れる (Matsuno, 2019)。これは「逆因果性 (retro-causality)」と呼ばれるが、両者が合奏を始め互いが予期可能圏に到達すると起きることだ。驚くなかれ、この逆因果性は巷に溢れているのだ。何かを二人で持ち上げるときの「せーのッ」、一本締めを合わせる前の「よーッ」、写真撮影前の「いち、にー、さん (ハイ)」でも何でもよい。これらの呼吸合わせ、時刻合わせは、同期を実現するための一般操作である。

VII ときはざま

こういう報告がある。生後5カ月の全盲の女の赤ちゃんのお母さんがミルクを飲ませながら子守唄を歌う。そのとき赤ちゃんは、身体を子守唄に合わせて動かし、視覚ゼロにもかかわらず、お母さんの発声の0.3秒前に手を振り上げる。赤ちゃんは唄をすでに記憶していて、それを予期モデルとして使うことで、お母さんとぴったり同期でき

るタイミングを測っている (Trevvarthen, 1999)。母子における一体感の確認である。また、親密性の表現でもある。この予期から導き出された運動は、刻みと刻みの間、つまり時のはざま、時 (とき) 狭間 (はざま) (野村, 2018a) において現出する事象だ。この時狭間、つまりビートとビートの間にくる計時運動のことを音楽では、アナクルーシス (Hasty, 1997) とか “upbeat” と呼ぶ。

拍と拍の間 (区切りと区切りの間) は何もないのではない。次の拍に移るための “upbeat” であり、刻みと刻みの間に存在する意味空間である。この時狭間は、いわゆる時間間隔とは異なる。先ほど壺外へご遠慮いただいた時計の時間 (B 系列時間) では、刻みと刻みの間は、何の意味ももたない虚無である。どれだけ細かく1秒を区切っても、そこでの時間間隔に意味が生じることはない。人が関わって作る “生きた時間” (E 系列の時間) との違いはそこである。音楽では、ビートとビートの間には、意味があり、かつそれは communicative (メッセージ性を有する) である。

VIII 共通する文法構造

時間は何系列であれ、「区切る (punctuate)」ことで「時間になる」という特徴をもつ。A 系列なら個人の生活のテンポ (区切り) が、B 系列なら自分から独立した機械のテンポ (区切り) が、そして E 系列なら、2人以上の参加者が共に作るテンポ (区切り) が、それぞれの時間系列を編み出していく。「区切る」ということが、共通する文法構造だ。

意味は文脈 (コンテキスト) によって生まれるが (Bateson, 1972)、B 系列の時間は文脈フリーで、意味から解放され、世界中で同期する普遍同期 (global synchrony) (松野, 2000) である。一方、E 系列の時間 (Nomura et al., 2018; 野村ほか, 2015) は、同期を達成しようと相互修正を続ける、その時その場の意味と一体化した局所同

期化 (local synchronization) (松野, 2000) である。お昼の 12 時の時報は、普遍同期 (B 系列の時間) で、遠足の保育園児への呼びかけ、「そろそろお昼にしましょうか」は、局所同期化 (E 系列の時間) の例と言えるだろうが、E 系列の時間という言葉が——時間が言語であったことをお忘れなく——前面に出ているときは、B 系列の言語は使われず控えていると考えたらいいだろう。日本人が英語で会話しているからといって、日本語という言語がなくなるわけではない。

そこで、E 系列の場合は、こちらの (保母さんたちの) 動きと相手の (子どもたちの) 動きが、相互の調整と交渉を経ていくことで、ひとつのまとまりある総体を作る。このまとまりを、石のようにはなく、生きものとして柔軟に保っていく仕組みが、対話的時間、すなわち E 系列の時間である。したがって時間するユニット (単位) も、音楽するユニットも、対話するユニットも、おしなべて時刻合わせという E 系列独自の時間文法に従っている。

IX それで?

「対話」の輪郭ではなく、「対話する」の輪郭を、ここまで描いてみた。ばらばらに見える「対話 (dialogue)」「音楽 (musicality)」「時間 (temporality) の 3 つが、双方向性と参加のロジックという魔法にかかると、「対話する」「音楽する」「時間する」というように、「私が誰々に」行為するという当事者の言葉に一括変換させられる。この一括変換されたものに共通する特徴を挙げると……。

1 つは、まず壺の内では、対話も音楽も時間も、言葉であること。対話はもちろんだが、合奏、合唱、即興演奏などの音楽も、広い意味で、音やリズムを通した演奏者間の言葉のやりとりだ。音楽的一体感を作り出していく機構は、同期現象と同様、お互いの「参与的ずれ」(Feld, 1988; 山田,

2017) を解消しつづける交渉、つまり対話的行為にある。また、時間さえも「する」という枠に入れこんだ場合、刻み (区切り) を相互に入れていき、互いのずれを交渉し続ける連続的行為である。

2 つ目は、壺世界においては、対話も音楽も時間も、どれも近未来から届く言葉たちであること。これらの行為群が成立する一般原理として予期行動を挙げたが、予想をもとに次の区切りに至る前に行動を起こす所作が同期へと結びついていく。その際、情報の伝達は、近未来の予想から発せられ、それを原因とし、その言葉は近未来から届けられる。お互いが会話に夢中になりテンポよく話が進む場合、相手に頷くのは、相手が言い終えてからではない。ほんの少し前倒しされているはずだ。「いま、ここ」が起動する鍵が、ここに潜んでいる。

3 つ目、全盲の赤ちゃんのところで触れたが、唄に合わせた身体の動きは同期を目指している。そのタイミング合わせが、母子であることの相互認証であり、合唱という身体を伴っての一体化であり、親密さの表現であることを疑う者はいないだろう。「音楽する」は、「対話する」と「時間する」の両者を貫く行為である。この文章は主語を取り替えてもまた成り立つ。人のところを開く対話——それを治療的と呼んでもいいが——があるとすれば、それは上のような「同期化」、すなわち「時間の共同制作」を通してであろう——時が過ぎるのを看過するでもない、またそれを止めようとするでもない、時の狭間にはたらく行為を通して。

以上の夢物語は、魔法が効いている間だけの話である。壺世界の外に出たら、魔法の効果はない。それさえわかれば、もう壺を割って外に飛び出しても大丈夫。それは、それ。これは、これ、なのだから。

▶ 文献

- Bateson G (1972) Steps to an Ecology of Mind. Chicago : Chicago University Press. (佐藤良明 訳 (2000) 精神の生態学. 新思索社)
- Berman M (1981) The Reenchantment of the World. New York : Cornell University Press. (柴田元幸 訳 (1989) デカルトからベイトソンへ—世界の再魔術化. 国文社)
- Feld S (1988) Aesthetics as iconicity of style, or 'Lift-up-over Sounding' : Getting into the Kaluli Groove. Yearbook for Traditional Music 20 ; 74-113. <https://doi.org/10.2307/768167>
- Hasty CF (1997) Meter as Rhythm. Oxford : Oxford University Press.
- 松野孝一郎 (2000) 内部観測とは何か. 青土社.
- Matsuno K (2019) Retrocausal regulation for the onset of a reaction cycle. BioSystems 177 ; 1-4. <https://doi.org/10.1016/j.biosystems.2019.01.006>
- McTaggart JE (1927) The Nature of Existence. Vol.2. Cambridge : Cambridge University Press.
- Mischiati M, Lin HT, Herold P et al. (2015) Internal models direct dragonfly interception steering. Nature 517 ; 333-338.
- 野村直樹 (2018a) 共創の時狭間—素の時間, 二人称の時間, E 系列の時間. ころと文化 17-2 ; 142-148.
- 野村直樹 (2018b) 無知の姿勢と二人称の時間—臨床における対話とは何か. 精神科学治療学 33-3 ; 5-10.
- 野村直樹, 橋元淳一郎, 明石真 (2015) E 系列の時間とは何か—「同期」と「物語」から考える時間系. 時間学研究 8 ; 37-50.
- Nomura N, Muranaka T, Tomita J et al. (2018) Time from semiosis : E-series time for living systems. Biosemiotics 11-1 ; 65-83. <https://doi.org/10.1007/s12304-018-9316-0>
- Sacks H, Schegloff EA & Jefferson G (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. Language 50 ; 696-735.
- Trevarthen C (1999) Musicality and the intrinsic motive pulse : Evidence from human psychobiology and infant communication. Musicae Scientiae 3 ; 155-215.
- 山田陽一 (2017) 響きあう身体—音楽, グルーヴ, 憑依. 春秋社.